

# ブラックベリーとデューベリー

## 1. 原生地と産地形成

### 1) 原生地と分類

両種の原生地はアジア西部、ヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカ大陸に及んでいるが、東アジアには原生しない。

#### (1) ブラックベリー

菊池秋雄によると、ブラックベリーの主要な基本種とその原生地は次のとおりである。

##### ① *Rubus allegheniensis* Porter

北アメリカの東部に原生する。栽培の起源は 19 世紀の中頃とされるが、次の 3 つの品種群に分けられている。

○長花序型：花序が細長く果実が長円形を呈する。‘Taylor’ ‘Ancient Briton’ ‘Early Cluster’ 等がこの品種群に属する。

○短花序型：花序が一般に短く、果実は円形。ブラックベリーの中では重要な位置を占め、‘Agawam’ ‘Success’ 等が代表的な品種とされる。

○白：果実は琥珀色から淡紅色までである。野生品種の中に生じたアルビノに改良を加えたものとされ、‘Iceberg’ が代表品種とされる。

##### ② *R. argutus* L.

北アメリカ東部の原生で、花序に葉を混生するため、葉付き花序ブラックベリーと呼ばれている。栽培歴は上記①より古いとされている。栽培品種は比較的少なく、‘Old Dorchester’ ‘Early Harvest’ 等が代表的品種とされる。

#### (2) デューベリー

代表的な種には、① *Rubus villosus* Arr. : 北部デューベリー ② *R. trivialis* Michx. : 南部デューベリー ③ *R. vitifolius* Cham. et Schlecht : 西部デューベリーの 3 種がある。

これらの種の代表的な品種には、‘Lucretia’ ‘Mayes’ ‘Loganberry’ 等がある。‘Loganberry’ は「Logan Blackberry」とも呼ばれ、特殊な

形質を有し、カリフォルニア州で発見されたもので、同州において重要な品種となっている。

(3) ブラックベリーとデューベリーの雑種

①粗花序型：*Rubus allegheniensis* とデューベリーの雑種と考えられている。

2) わが国における栽培概況

わが国における栽培概況は前述したラズベリーと同様である。

## 2 . 分類と品種

ユーバタス区に属するブラックベリーは、雑種性が極めて高い。基本染色体数は7 ( $2x=14$ ) であるが、2倍体から12倍体 (染色体数84) のものや、異数体 ( $2x=53$ ) まである。

平成8年現在、国の果樹遺伝資源管理利用システムの一環として、現果樹研究所と北海道農業研究センターが保存している品種は、合計で10である。これらの中で代表的な品種の特性を示すと以下のとおりである。なお、縮物分類学者は、ブラックベリーとデューベリーとを区別していない。

### ベリー

ニューヨーク州立農業試験場の G.L.Slate が育成し、昭和25年に公表した。両親は不明である。茎条の発育は旺盛である。豊産性で果実は大きい。果実の硬さは中位で甘酸適和であるが、香気は強くない。品質は優良である。

### ダーロー

ニューヨーク州立農業試験場の G.L.Slate が育成し、昭和33年に命名・公表した。交配年次は昭和15年で、組み合わせは 'Eldorado' × 'Brewer' である。昭和21年に初結実し、25年に選抜された。茎条の発育は旺盛で豊産性である。ニューヨーク州で栽培されている品種の中では耐寒性が強い方である。果実は大きく、縦2.5cm、横2cm位、果形は長円錐形である。果実は硬く甘酸適和で、品質は優良である。親の 'Eldorado' と同時期かやや早く熟すが、収穫期の幅はやや長い。二季成り性である。

その他、'ヘドリック' 'ボイスン' 'ヤング' 'ソーンフリー' 'マートンソーンレス' がある。

### 3 . 形態と生理・生態

#### 1 ) 形態

ブラックベリーの茎条は直立性、開張性、匍匐性等種々の性状を有するが、デューベリーは一般に匍匐性を示す。花は2年目の茎条から発生した新梢の先端部に花序を形成して着生し、開花、結実する。2年目の茎条はブドウの親蔓に相当するものであり、種茎(結果母枝)と呼ばれる。この親茎は果実収穫後、次第に衰退し翌春までに枯死し、年々更新される。普通茎にはトゲを生ずるが無刺の品種も存在する。葉は互生し、一般に長い柄を持つ羽状の3出葉であるが、時に5出葉の場合もある。

ブラックベリーの花序は散房花序または総状花序で、基部から先端に向かって順次開花する。これに対しデューベリーは集散花序で、開花の順は中心花から順次周囲の花に及ぶ。また、デューベリーの花数は概してブラックベリーより少なく、従って果実が粗着となる。花は白色で花弁は5枚、星形で上向きに開花する。

果実の形態(集合果と花托との関係)はブラックベリーとデューベリーとも同じである。花托は肉質が柔軟であり、集合果に接着して心部を形成し、成熟期になると集合果に付着して花盤から分離する。軟肉の心を有することから、小核果は相互に密着して分離せず、果実の原型を維持する。収穫後の花盤表面は平滑で、ガク片を残すだけである。

#### 2 ) 生理・生態

結果母枝の発芽期は札幌市で4月中・下旬、展葉期は4月下旬~5月上旬である。展葉後数日で結果枝となる新梢が伸長し始める。開花は札幌市で6月中・下旬に始まり、7月中・下旬に終わる。1株の開花期間は通常25~30日に及ぶ。また、二季成り性品種の2回目の開花は8月中旬から始まる。一般に自家和合性であり、放任してもよく結実する。

果実の着色は開花後30~35日頃に始まり、それから4~5日で成熟する。札幌市での収穫は7月下旬頃となる。1品種の収穫期間は約25~30日である。

#### 3 ) 気象と土壌

ブラックベリーとデューベリーは、ラズベリーより耐寒性が劣り、 -

20 が限界温度とされている。また、熟期が遅くラズベリーの適地より高温の地方に適しており、札幌市では未熟で終わることがある。

土壌条件に対する適応性の幅はかなり広く、極端な排水不良地や乾燥地でなければよく生育する。ただし、最適地は有機質に富んだ保水力のある砂壤土で、土壌酸度は pH5.5 ~ 7.5 の範囲が適当である。

## 4 . 栽培管理

### 1 ) 苗木の繁殖

ブラックベリーの繁殖は、通常株分け法によっている。株元に発生した吸枝を休眠期に掘りあげて苗畑に移植し、1年間養成する方法が一般的である。このほか休眠期に根を掘り上げ、10cm程度の長さに調整し、根挿しを行うことも可能で、これによると多数の個体を短期間で養成することができる。

なお、ブラックベリーやデューベリーの匍匐性品種では、伸長中の新梢を横伏せし、盛り土を行って発根させ、これを切り取って個体を得る取り木法も有効である。

### 2 ) 栽植

定植は落葉後の秋植えと、発芽前の春植えのいずれでもよいが、冬期に凍結の見られる地域では春植えとした方が安全である。

栽植距離は、土壌条件や品種、さらに仕立て方によって異なるが、一般的に垣根仕立てでは列間2.0～2.5m、株間1.0～1.5m位が適当である。また、株仕立てでは2.0m程度の間隔をとった正方形植えが望ましい。

### 3 ) 整枝・剪定

休眠期の剪定は、株元での更新剪定が一般的である。通常、結実を終えた茎条は翌年枯死するため、これらの古い茎条は全て取り除く。また、弱小な茎条も同時に取り除き、新たな強勢な吸枝の発生を待つ。さらに、込み過ぎた箇所では、適度な間引きが必要である。時には本年実を着ける茎条（結果母枝）の切り戻しを行う。切り戻しの時期は若干遅くし、新たに伸長する結果枝の花芽の着生状態を見極めてからにしてもよい。切り戻しの度合いが余り強いと収量が少なくなるので、注意する。

夏期剪定としては、新梢の伸長が70～90cmに達した時点で先端部の剪除を行う。これによって茎条は強固となり、支柱をしなくても済む。また摘心部以下の葉えきから発生した枝は結果枝となり、多収が期待できる。

ブラックベリー、デューベリーは一般に自家和合性を示すことから、受粉樹の植栽を考慮する必要はない。

#### 4) 病虫害防除

病虫害は比較的少なく、特に病害の発生は極めて稀である。害虫としてはナミハダニが付きやすい他は、ハマキムシ、シャクトリムシ、アブラムシ類が見られる程度である。

## 5 . 消費

夏の高温期が収穫期となるが、もともと果実が軟らかく日持ち性が悪い  
ため、収穫適期を逃さないよう注意することが肝心である。収穫果は  
直射日光にさらすと日の当たった部分が日焼けを起こし、黒色が抜けて  
茶色に変色し、苦味が強く出て、生食に耐えないものとなる。このため、  
収穫果は直ちに日陰に置くか、冷蔵庫に持ち込むことが肝要である。収  
穫後の日持ちは常温で3日が限界と見た方がよい。

成熟した果実は、甘味、酸味を有するが、香りはさほど強くない。そ  
のまま生食することができるが、主に加工原料として利用される。加工  
用途はラズベリーと同じである。